

第157回埋蔵文化財セミナー

主催 京都府教育委員会
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府の

弥生時代

の様相

2025
2月
22日
土

京都JAビル
13時30分～16時20分



松田墳墓群土器出土状況

入場
無料

申込
不要

第157回埋蔵文化財セミナー

京都府内の弥生時代の様相

日 程

- 13時30分 開会あいさつ
京都府教育庁指導部文化財保護課長 石崎善久
- 日程説明(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課課長補佐兼企画調整係長 筒井崇史
- 13時40分 報 告 1
「京都市中久世遺跡の調査」
(公財)京都市埋蔵文化財研究所
調査課調査研究技師 渡邊都季哉氏
- 14時25分 報 告 2
「京丹後市松田古墳(墳墓)群の調査」
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課調査員 名村威彦
- 15時10分 休 憩
- 15時20分 講 演
「最新の弥生時代像と京都の弥生遺跡」
立命館大学文学部教授 長友朋子氏
- 16時30分 閉 会

主 催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
会 場 京都JAビル

京都市中久世遺跡の調査

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 渡邊 都季哉

1. 中久世遺跡の立地

調査地は京都市南区久世中久世町に所在する遺跡です。桂川右岸の北は京都市の桂川駅周辺から南は大山崎町までの地域は、乙訓地域と呼ばれています。河川から供給される土砂によって、広い沖積地が形成されています。既往の調査から、調査地周辺は複数の旧流路が北西から南東方向に向かって流れており、調査地から南東方向に位置する大藪遺跡で合流すると考えられています。複数の流路から形成される微高地の上に調査地は立地し、いわゆる乙訓低地帯遺跡群の一つです。周囲には、北方に上久世遺跡、西方に向日市修理式遺跡、同市久々相遺跡、同市野田遺跡、南西に溝路遺跡などがあります(第1図)。中久世遺跡は、JR向日町駅の東側一帯、南北長最大約800m、東西長最大約800mに広がります。



第1図 調査地位置図(S=1/10,000)

2. 令和5年度調査の紹介

令和5年秋、工場建設に伴って行われた発掘調査では、弥生時代の遺構を多数検出しました。以下ではその内容を紹介します。

弥生時代中期^{ちゆうよう}中葉 (第3図)

堅穴^{たてあな}建物2棟、土坑^{どこう}10基を検出しました。堅穴建物は円形で、最小で直径4mと、かなり小さいものもありました。深さは約10cm弱です。中央には、炉と考えられる土坑がありました。一方、堅穴建物の外側で見つかった土坑はごみ捨て穴と考えられます。その埋土には、炭化物を多量に含んでおり、その内容は広葉樹や針葉樹のほかに炭化米などがありました。ほかにも微量ながら焼けた動物の骨がありました。土器も出土しましたが、その多寡^{たか}、残り具合は土坑によって異なります。

遺物では、堅穴建物310からは摂津^{せつづ}、土坑400からは近江^{おうみ}や摂津からの搬入品と考えられる土器が出土しています。ほかにも調査地周辺では産出されない紅簾片岩^{こうれんへんがん}製の石鋸^{いしのこ}と碧玉^{へきぎよく}の剥片が出土していることから、玉生産を行っていたと考えられ、地域間交流も活発であったことがわかりました。

弥生時代中期^{ちゆうよう}後葉 (第4図)

堅穴建物4棟、土坑3基を検出しました。堅穴建物には、円形、五角形、方形と多様な形があります。円形のものは、直径8m以上あります。土坑の数は前の時代と比較して減少します。

弥生時代後期中・後葉 (第5図)

堅穴建物4棟を検出しました。弥生時代後期になると、それまであった土坑は見られなくなりました。堅穴建物は方形で、大きいもので一辺約7mのものがあります。堅穴建物の中央部は、被熱した痕跡があり、炉と考えられます。堅穴建物どうしに重複があるので、時期差や建て直し等が考えられます。出土した土器は、近江からの搬入品や、それを模して在地の土で作ったもの、生駒山西麓^{いこまさんせいろく}産土器などが出土しており、この時代も他地域との交流が行われていることが明らかとなりました。

3. 周辺調査

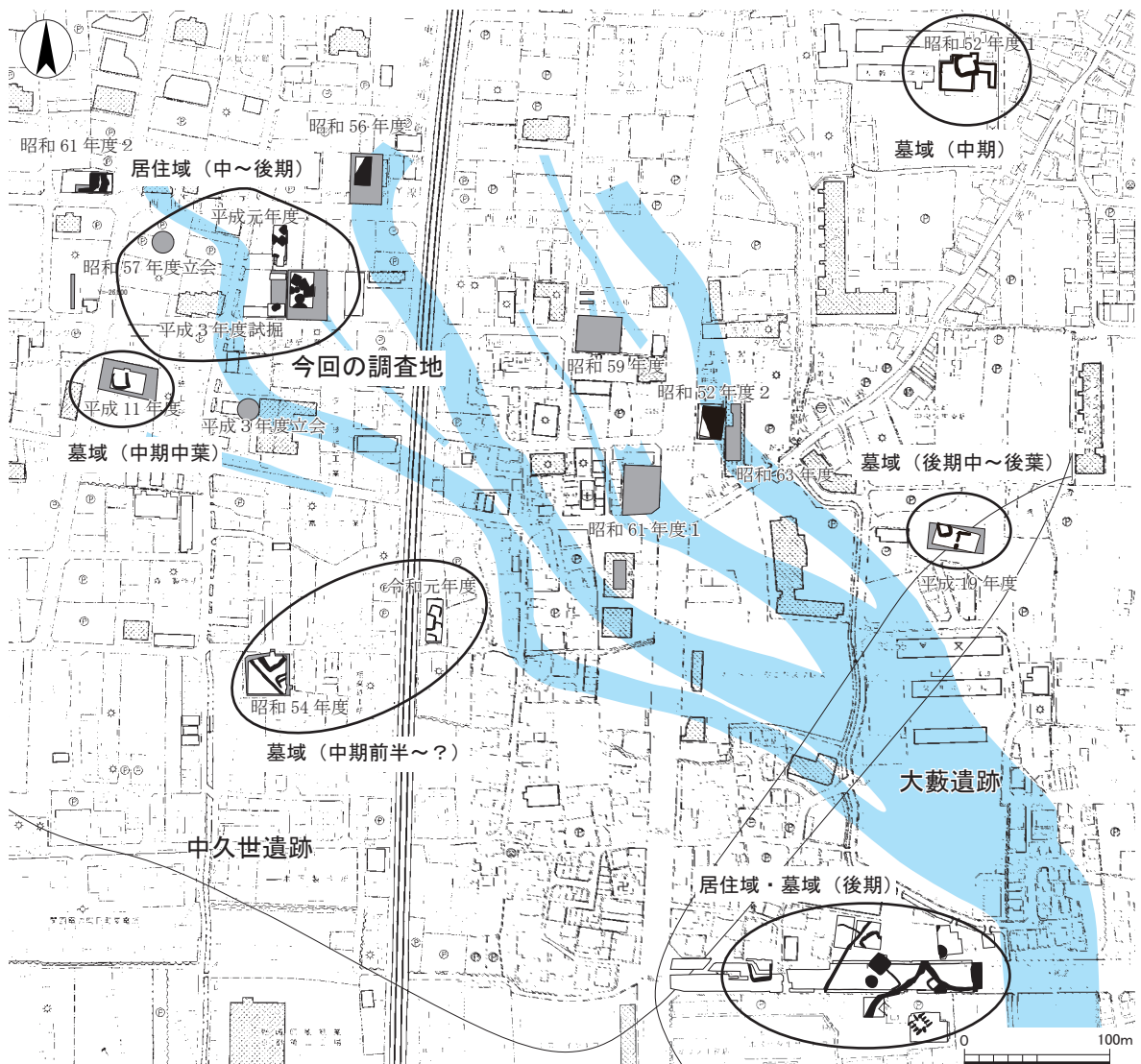
今回の調査では、弥生時代中期から後期にかけて、堅穴建物10棟を検出しました。ここからは、ほかの調査で検出した遺構を紹介します。

隣接地の平成元年度発掘調査、平成3年度試掘調査でも堅穴建物が検出されています。平成元年度調査では方形の堅穴建物が4棟検出されています。時期は古墳時代に属すると報告されていますが、掲載された出土遺物を再検討したところ、弥生時代後期後葉に比定できることから、堅穴建物250と同時期をとらえても差し支えはないことが明らかとなり

ました。平成3年度試掘調査でも、竪穴建物2棟が検出されています。埋土から弥生時代後期の遺物が出土したと報告されています。また、調査地から約100m北西にある昭和57年度立会調査でも弥生時代後期の竪穴建物が2棟検出されており、弥生時代後期の竪穴建物は合計で12棟検出されていることとなります。このように今回の調査地周辺では、弥生時代後期の竪穴建物が多数検出されていることから、居住の中心地であったと考えられます。

さらに中久世遺跡全体をしてみると(第2図)、周辺調査から、北西から南東方向に向かって流路が流れており、出土遺物からおおむね平安時代ごろまでに埋没したと考えられています。

調査地を居住地とすると、流路近くの微高地に立地する居住地であることがわかります。また、墓域をしてみると、復元流路からやや離れた場所^{ほうけいしゅうこうば}で方形周溝墓が築造されています。方形周溝墓の時期は、昭和52年度、54年度、平成11年度、令和元年度調査が弥生時代中期



第2図 弥生時代の中久世・大藪遺跡遺構分布(S = 1/5,000)

に比定されています。なお、平成11年度の方形周溝墓はⅢ様式(弥生時代中期中葉)の土器が出土しています。令和元年度調査の方形周溝墓は、周溝からⅡ様式(弥生時代中期前葉)の土器が出土しています。今回は弥生時代中期前葉の遺構は検出していませんが、もしかするとどこかに眠っているのかもしれませんが。また、今回の調査で、中久世遺跡にも弥生時代中期から竪穴建物を伴い、人々が生活していたことが明らかとなりました。

以上のように、弥生時代中期においては、流路付近に立地する居住地と、流路から離れて立地する墓域という遺跡の構造が見えます。

弥生時代後期になると、調査地およびその周辺で竪穴建物が密集するようになり、居住地として活発に利用されていたことがわかります。墓域は後期の方形周溝墓が検出された平成19年度調査が現在検出されている唯一の例であり、調査地とは約500m離れています。

また、弥生時代後期になると、調査地より南東で大藪遺跡が成立し、大型の掘立柱建物や区画溝が検出されています。中久世・大藪遺跡を含む調査地一帯で人々の生活が活発になったと考えられます。

4. まとめ

従来、中久世遺跡は流路などから出土する多量の遺物から、乙訓地域における弥生時代中期の主要な集落遺跡と評価されてきました。一方で、集落域の明確な位置や、その構造、変遷など不明な点も課題として残されてきました。今回の調査で、当地一帯が少なくとも弥生時代中期中葉から居住地であったこと、弥生時代後期中葉から後葉にかけても竪穴建物が密集する居住地であることが明らかとなったことは、京都における弥生時代に対する理解の一助になると考えられます。

参考文献

- 伊藤淳史2000「山城地域における弥生集落の動態」『みずほ』32号 大和弥生文化の会
- 伊藤淳史2013「集住から散住へ ―弥生後期「乙訓低地帯遺跡群」への評価―」『弥生研究の群像』みずほ別冊 七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念 大和弥生文化の会
- 柏田由香・古川 匠・浅井猛宏2014「山城地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会2014年度拡大例会・シンポジウム 古代学研究会
- 國下多美樹2013「集落形成にみる地域の個性断章 ―乙訓らしさとは何か―」『弥生研究の群像』みずほ別冊 七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念 大和弥生文化の会
- 渡邊都季哉編2024『中久世遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2023-8 (公財)京都市埋蔵文化財研究所



写真1 中久世遺跡 令和5年度調査全景（北東から）



写真2 竪穴建物 310・311
（弥生時代中期中葉）（東から）



写真3 竪穴建物 320
（弥生時代中期後葉）（東から）



写真4 土坑 400
（弥生時代中期中葉）（北西から）



写真5 土坑 318
（弥生時代中期中葉）（東から）



写真6 竪穴建物 320 (外側)・500 (内側)
(弥生時代中期後葉、後期) (北東から)



写真7 竪穴建物 250
(弥生時代後期) (北東から)



写真8 土坑 240 出土土器
(弥生時代中期中葉)



写真9 土坑 562 出土土器
(弥生時代中期後葉)



写真12 石剣



写真13 石錐



写真10 竪穴建物 250 出土土器
(弥生時代後期)



写真11 竪穴建物 250 出土土器
(弥生時代後期)



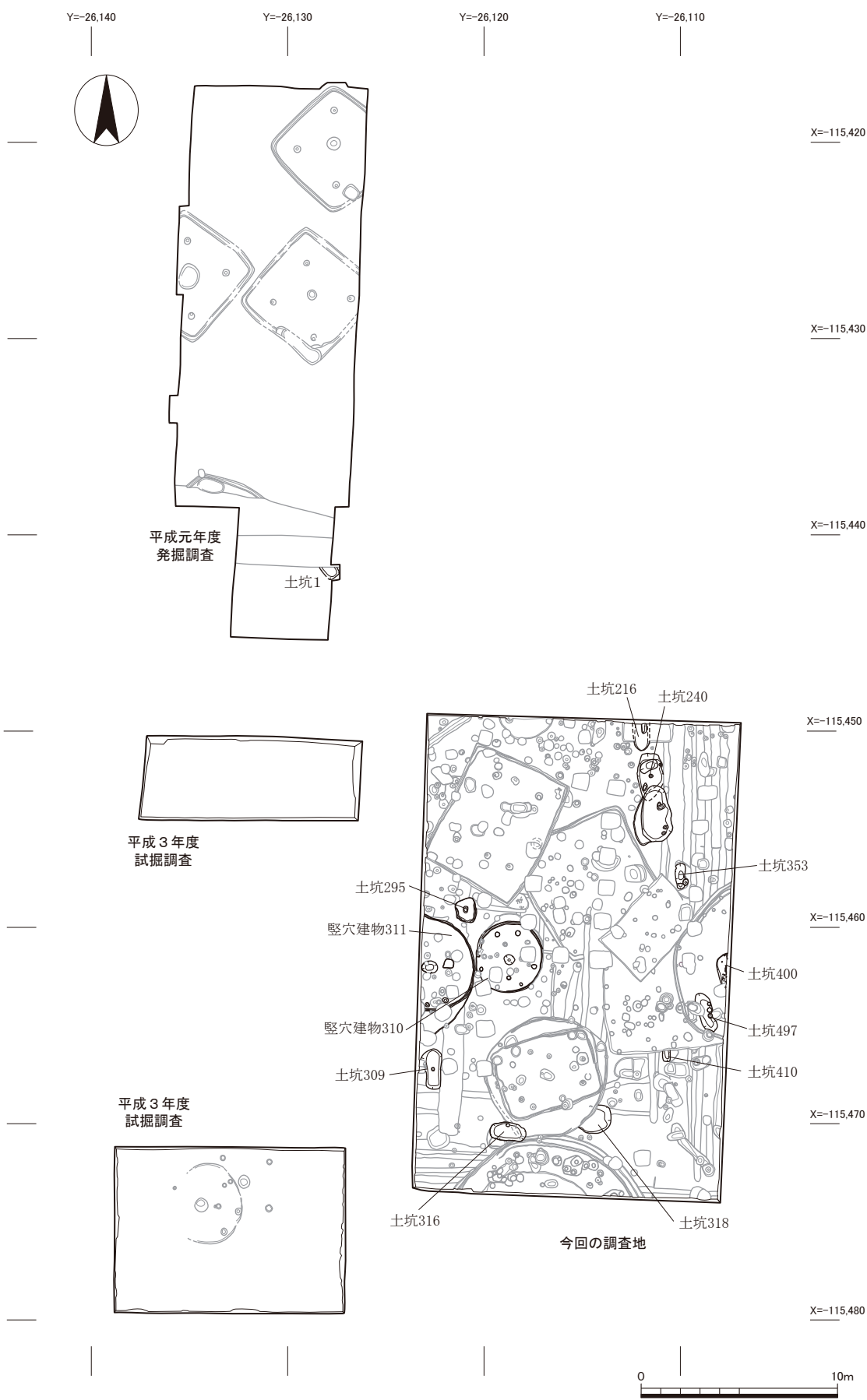
写真14 石鋸



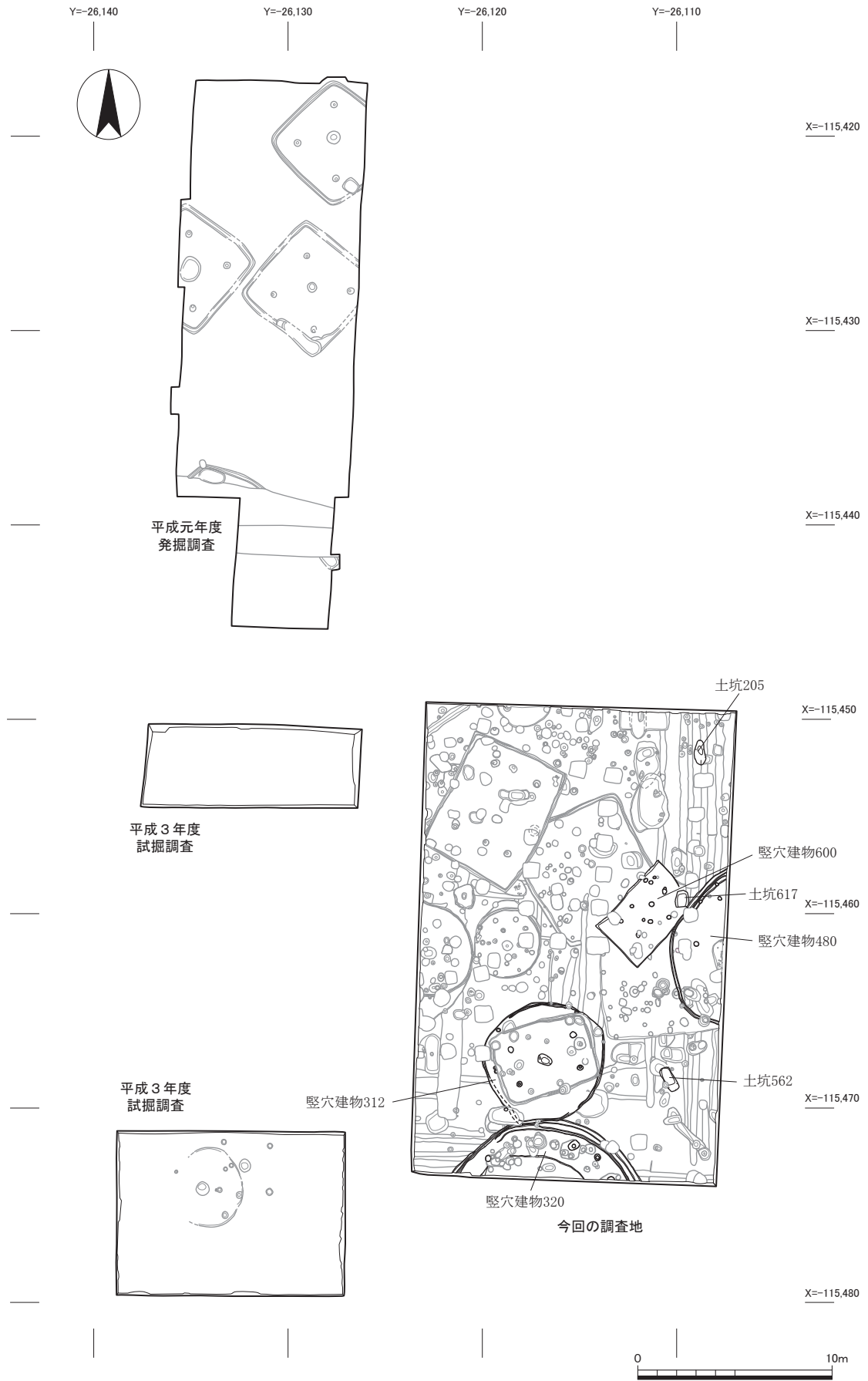
写真15 石鏃



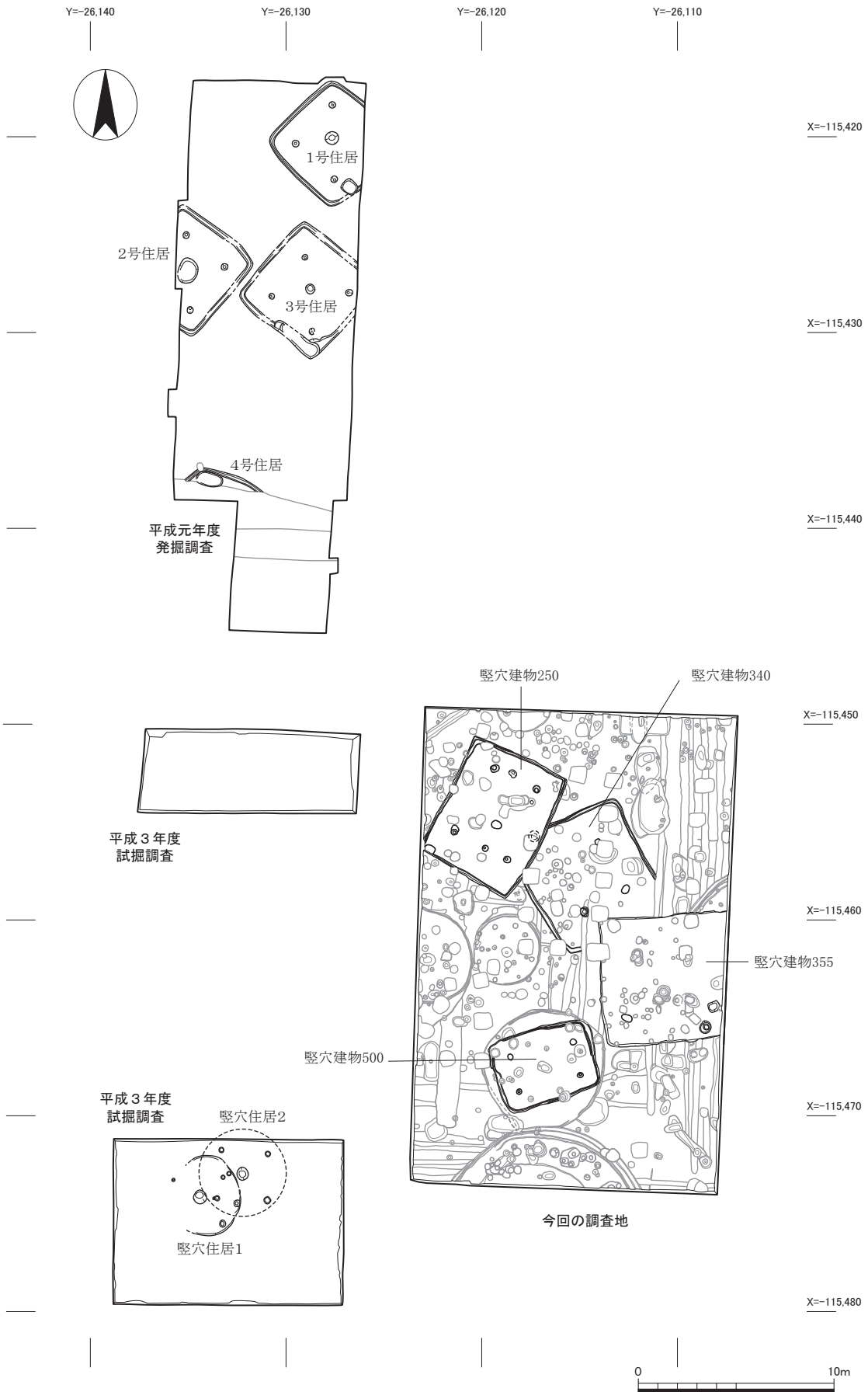
写真16 石包丁



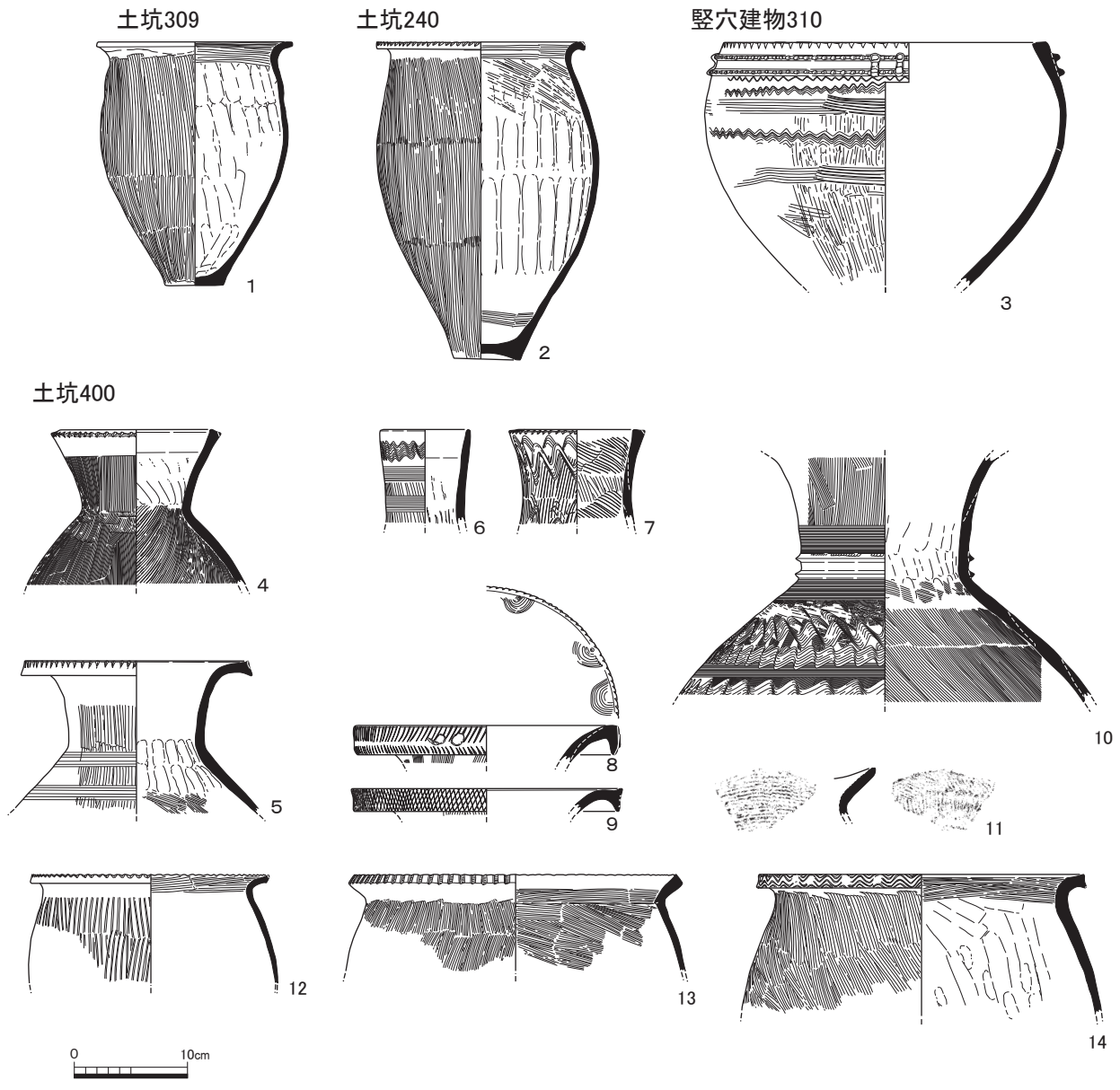
第3図 調査区平面図(弥生時代中期中葉)(S = 1/300)



第4図 調査区平面図(弥生時代中期後葉)(S=1/300)



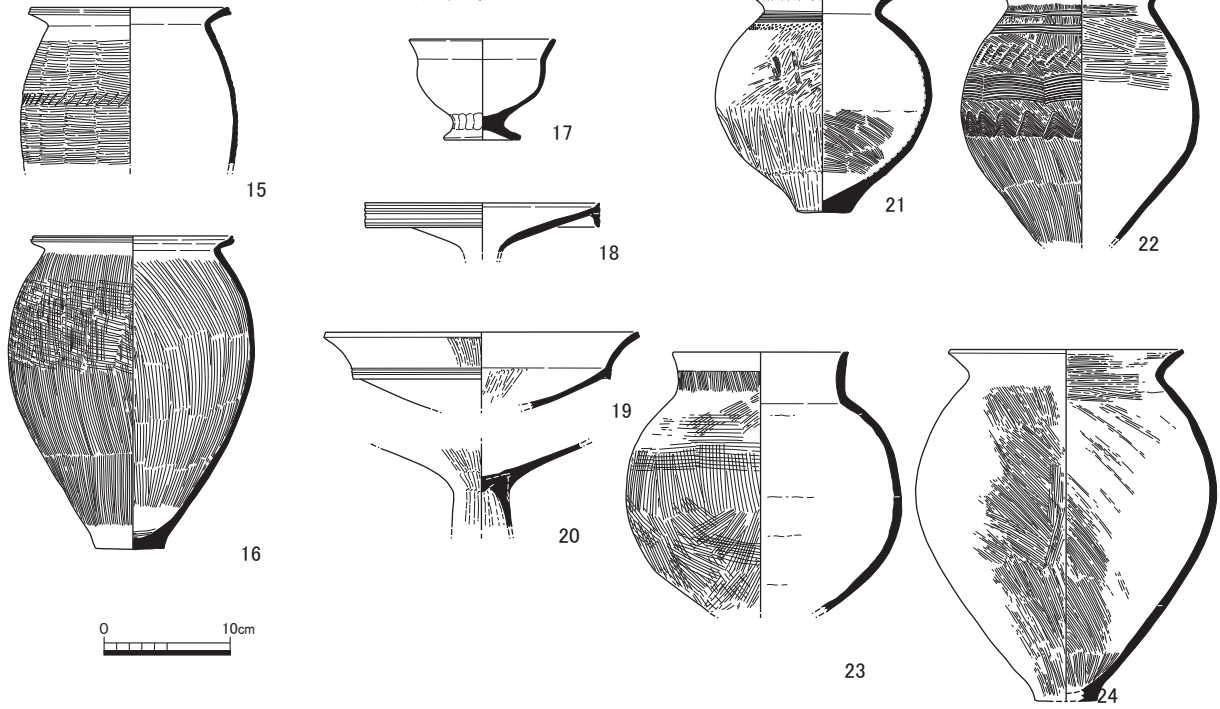
第5図 調査区平面図(弥生時代後期中・後葉)(S=1/300)



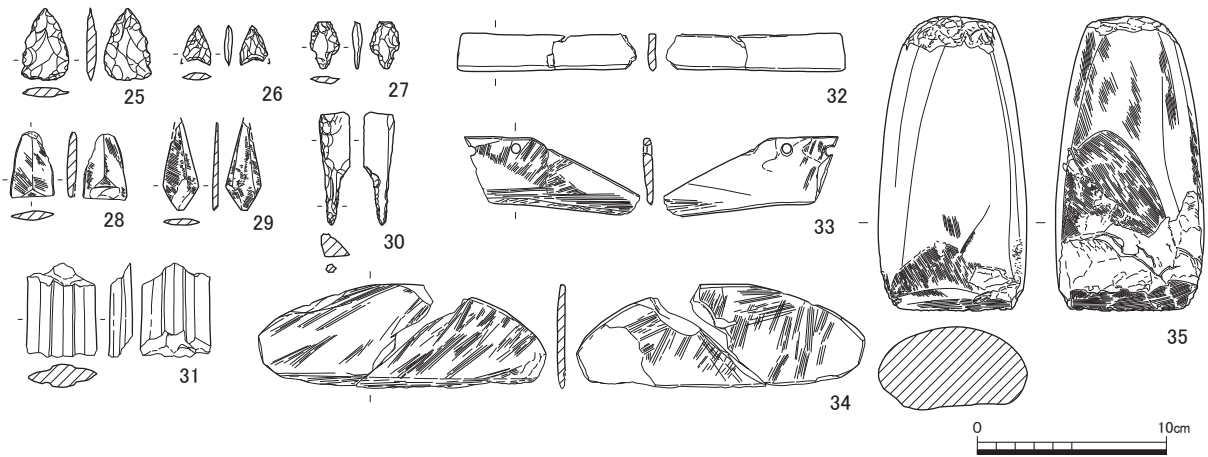
第6图 出土土器实测图1 (S = 1/6)

土坑562

竖穴建物250



第7图 出土土器实测图1 (S = 1/6)



第8图 出土石器实测图(S = 1/4)

12

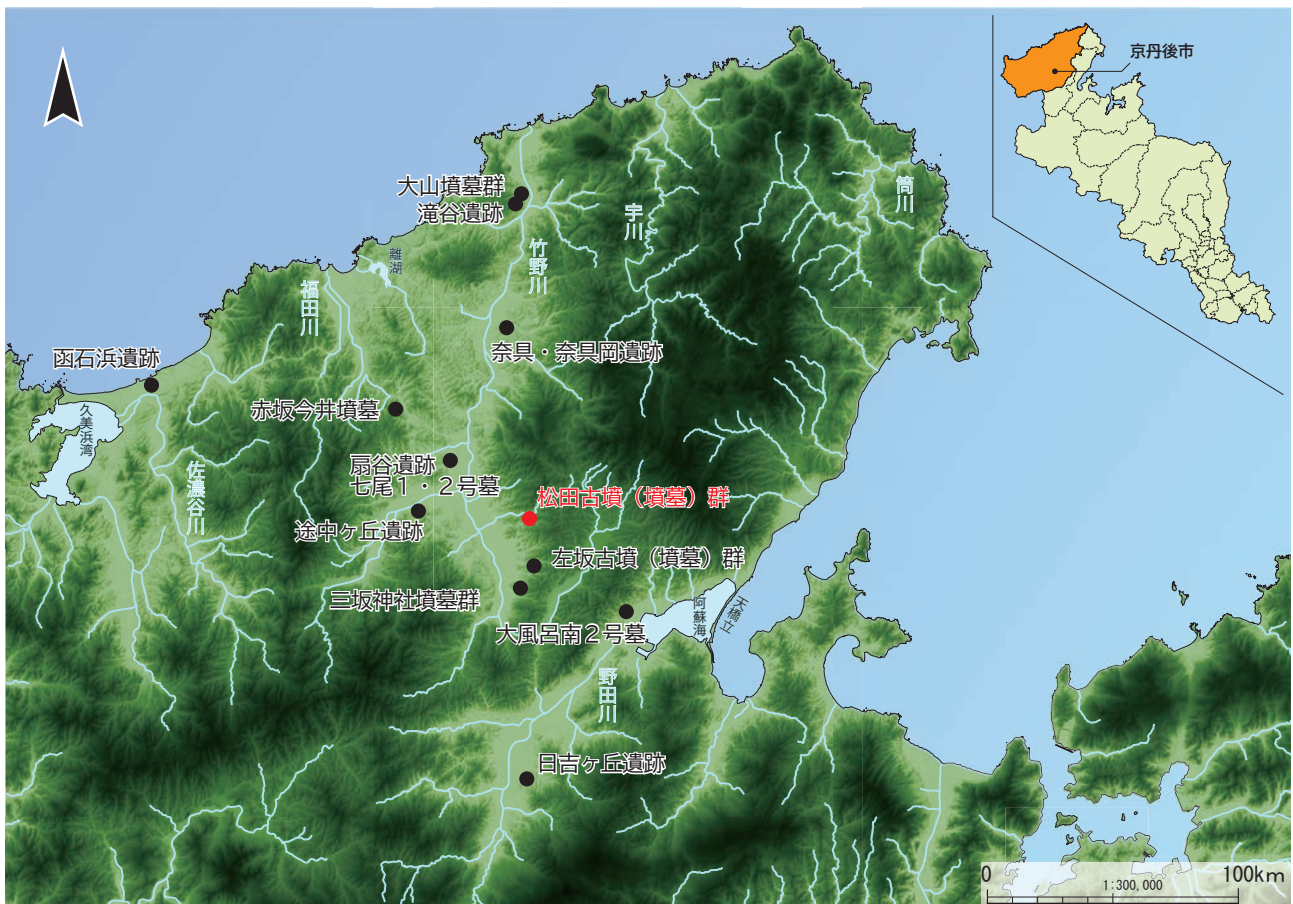
メモ

京丹後市松田古墳（墳墓）群の調査 ～弥生時代から古墳時代にかけてのお墓～

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 名村 威彦

1. 松田古墳（墳墓）群の調査

松田古墳（墳墓）群は京丹後市大宮町河^{こうべ}辺に位置します。京都府の南北をつなぐ京都縦貫自動車道の延伸部分にあたる一般国道312号大宮峰山道路の建設に伴い、令和5・6年度に調査をしました。松田古墳（墳墓）群は、京丹後市内で最も広い平野である中郡盆地の東側の山の上に広がる古墳（墳墓）群で、近くには丹後半島で最も長い川である竹野川とその支流、大谷川が流れています（第1図）。面積にして約18ヘクタールほどの広さがある松田古墳（墳墓）群では、59基のお墓がみつかっており、お墓のまとまりごとにAからEまでの支群に区別しています（第2図）。令和5・6年度はB支群を調査し、弥生時代のお墓と古墳をあわせて11基確認しました。



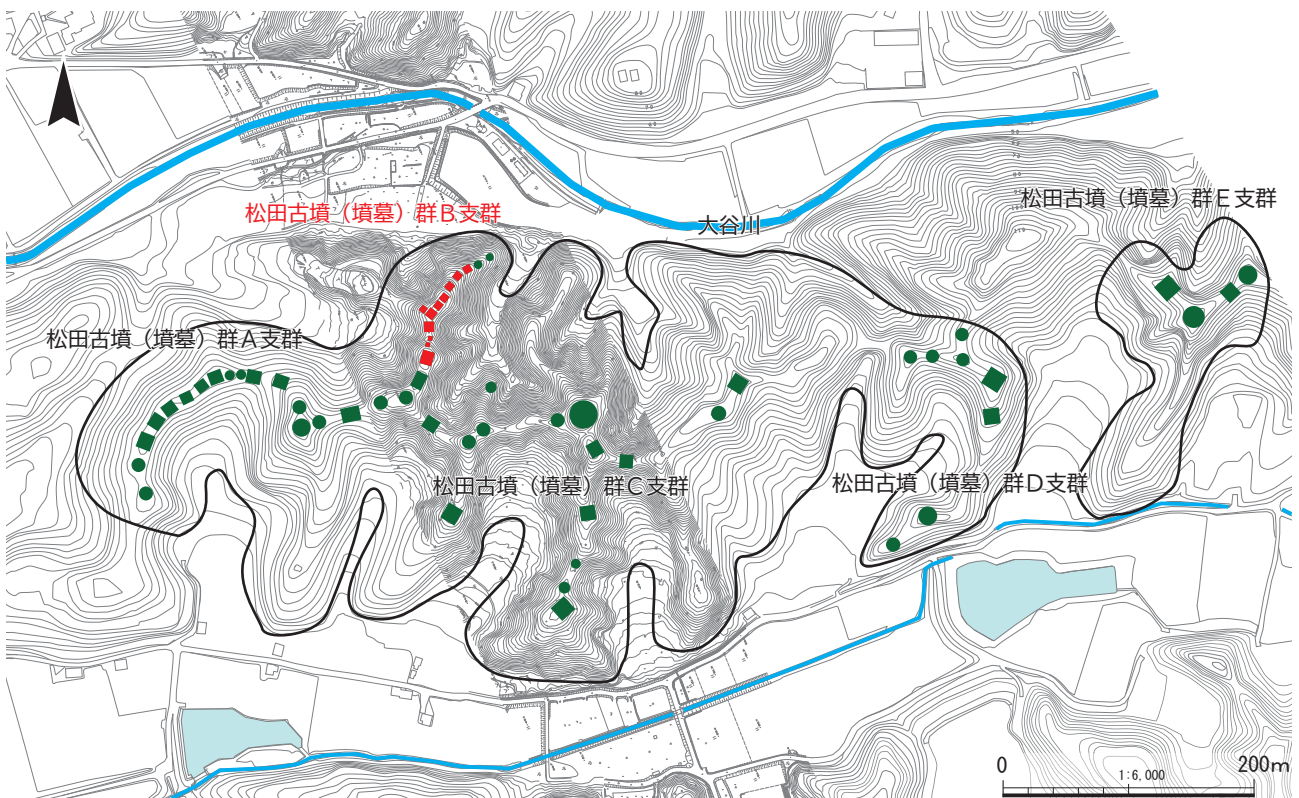
第1図 松田古墳（墳墓）群の位置と周辺の遺跡

2. 調査成果

令和5・6年度の調査ではB支群の9～12号墳、13～17号墓、20・21号墓の11基を調査しました(第3図)。1つのお墓に複数の埋葬施設(墓穴)が掘られているものもあり、埋葬施設をすべて合わせると49基になります。その中でも特に遺物が出土したお墓や埋葬施設(墓穴)を中心に紹介します。

B-17号墓 幅約7.7m、長さ約5.7mの半円形の平坦面で2基の埋葬施設がみつかりました。2基のうち大型の埋葬施設を削るように掘られた浅い土坑から弥生時代の銅鏃(写真1)と鉄鏃が出土しました。京丹後市内では弥生時代の銅鏃は函石浜遺跡や滝谷遺跡、大山墳墓群などに出土例がありますが、10点がまとまって出土した例はありません。布に包まれて埋められていたようで銅鏃の表面に布が付着していました。

B-16号墓 幅約13.2m、長さ約7.5mの半円形の平坦面で土器棺を含む12基の埋葬施設がみつかりました。一番最初の埋葬で平坦面の中央に掘られた最大の埋葬施設を囲むように中小の埋葬施設が掘られています。埋めた墓穴の上に土器をおいて葬送儀礼(お葬式)をおこなっていたようで、一部の土器は置かれた当時の状況をとどめていました(写真5)。大型・中型の埋葬施設を中心に緑色凝灰岩製の管玉やガラス製の勾玉などの装飾品(アクセサリー)が出土したほか、鉄製の剣や槍などの武器が出土しました(写真2・4)。中央に掘られた埋葬施設では舟底状木棺の痕跡が明瞭に確認できました。



第2図 松田古墳(墳墓)群の全体図



写真5 土器出土状況

では剣や管玉(装飾品)が出土しました。B-21号墓では赤色顔料が見つかった埋葬施設(墓穴)もあります。

B-12号墳 長辺11.5m、幅4.5mの長方形の平坦面で1基の埋葬施設(墓穴)が見つかりました。お墓は尾根の上に掘られた2条の溝で区画されています。中からは鉄製の剣や刀子(ナイフ)、鉈が出土しました。なかでも剣は長さ約77cmで、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期の鉄剣としては大型のものです。

B-9号墳 長辺12.0m、短辺7.2mの平坦面で1基の埋葬施設(墓穴)が見つかりました。墳丘は東側が崩れてしまっているようで、本来はもう少し大きかった可能性があります。南側は溝を掘って区画しています。墳丘の頂上から溝の底までは深さ約1.7mあり、かなり深く掘られています。溝の中から墳丘の上から転落したであろう土器が出土しました。

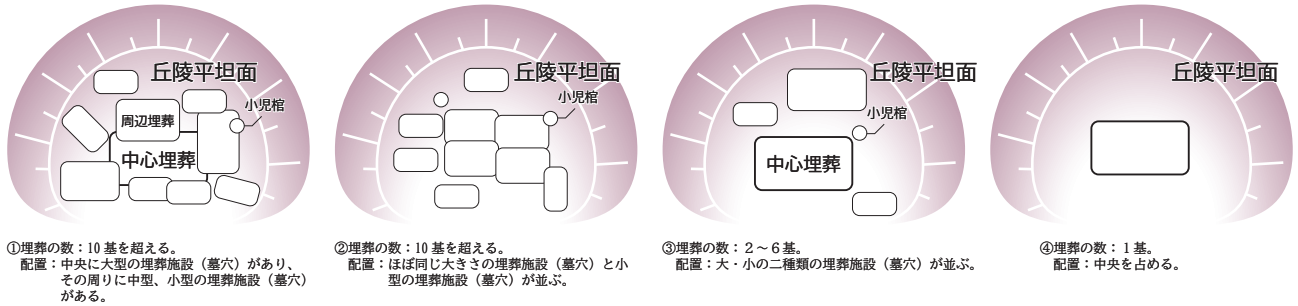
3. 松田古墳(墳墓)群の埋葬の変化

松田古墳群の調査では、石器、土器、青銅器、鉄器、玉類と多彩な種類の遺物が出土しました。これらの遺物をみても、いずれも弥生時代の終わりごろから古墳時代のはじめごろのものと捉えられます。調査では丘陵の上に11基のお墓が隣り合うように作られたことが見て取れ、一定の期間に順番に造られていったように見えます。それぞれのお墓では亡くなった人を埋葬する穴を掘り、穴の中に棺を置いて、遺体を安置したようですが、その穴の数や、作り方はいくつかのパターンに分けられそうです。

①埋葬の数:10基を超える。配置:中央に大型の埋葬施設(墓穴)があり、その周りに中型、小型の埋葬施設(墓穴)がある。(B-16号墓)

②埋葬の数:10基を超える。配置:ほぼ同じ大きさの埋葬施設(墓穴)と小型の埋葬施設(墓穴)が並ぶ。(B-15号墓)

③埋葬の数:2~6基。配置:大・小の二種類の埋葬施設(墓穴)が並ぶ。(B-13号墓、



第4図 埋葬方法の種類

B-14号墓、B-17号墓、B-20号墓、B-21号墓)

④埋葬の数：1基。配置：中央を占める。（B-9～12号墳）

丹後地域における弥生時代のお墓の変遷や性格について、これまでの研究でいくつかの説が提示されています(肥後1996、野島・野々口1999・2000)。

1. 大小の埋葬施設(墓穴)からなり、家族墓のような性格がある。一つのお墓に複数の埋葬がみられる場合、それらは一つの「親族」の可能性があり、一世代で一つのお墓をつくった。

2. 鉄製の武器類が副葬された埋葬は男性の可能性がある。玉類のみ副葬されている埋葬は女性の可能性がある。土器棺は小児埋葬の可能性がある。

3. 弥生時代から古墳時代にかけて、多数の埋葬が行われるお墓だけではなく、少数の埋葬が行われるお墓がつくられるようになり、古墳時代には単数埋葬のお墓が現れる。

こうした研究を参考に松田古墳(墳墓)群の埋葬について考えてみます。まず10をこえる埋葬が確認されたお墓としてB-16号墓をみてみます。B-16号墓では12の埋葬がみつっていますが、その中で鉄製品が出土した埋葬は4つあります。また、玉類のみが出土した埋葬は二つあります。土器棺は一つ見ついています。仮に上記「1」と「2」を当てはめてみると、ある世代の家族のうち、このお墓に埋葬された男性が4名、女性が2名、乳幼児が1名、さらに性別は分からない人物が5名ということになります。性別がわからない埋葬のうち二つはやや墓穴が小さいので、2名は子供であったのかもしれませんが、女性の埋葬が男性と比較して少ないようにみえますが、性別が明らかでない残りの3つが女性の可能性もあります。

さて、このお墓に一世代の「親族」が葬られたと仮定すると、成人男性4名・成人女性2名はほぼ同世代になります。兄弟姉妹でしょうか。あるいは、男女は夫婦で、義兄弟や義姉妹と一緒に葬られた可能性もあるでしょう。弥生時代の日本の様子的一端を伝えるとされる『魏書』東夷伝倭人条(魏志倭人伝)の中では「其俗國大人皆四五婦 下戸或二三婦(その俗、国の大人は、皆四、五婦、下戸もあるいは二、三婦。)」とあるので、男性は複数人

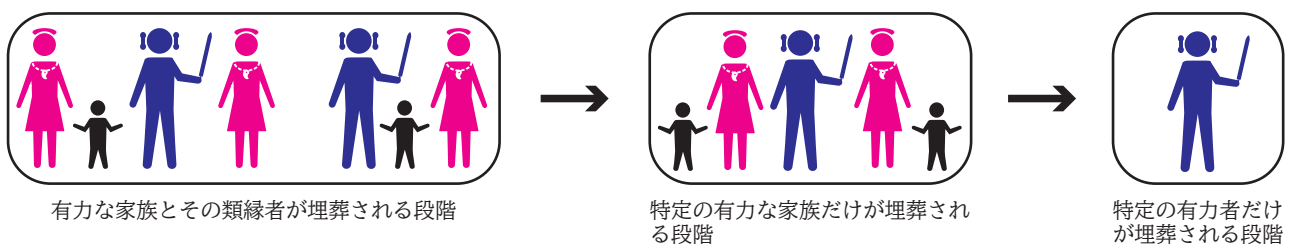
の妻をもっていたようです。また、有名な女王卑弥呼については「其國本亦以男子為王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子為王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫婿有男弟佐治國（その国、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歷年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿なく、男弟あり、佐けて国を治む。）※読みは諸説あり」と記載されており、姉弟で統治していることがわかります。松田古墳（墳墓）群に葬られた男女の関係が夫婦かあるいは兄弟姉妹か、はっきりとはわかりませんが、男性も女性も複数人が同じお墓に丁重に葬られていたことが想像されます。

次に、6基の埋葬施設（墓穴）をもつB-13号墓をみてみます。五つのうち鉄製品が出土したのは一つで、男性が埋葬されている可能性があります。残りの四つからは出土遺物がありませんが、一つは土器の棺が用いられているので、乳幼児の埋葬です。また、三つは小型の墓穴なので、子供と考ええると、残りの一つが女性の可能性があります。そのように仮定してみるとB-16号墓の埋葬と比べてずいぶんと埋葬される人の数が減っています。

さらに、1基の埋葬施設（墓穴）のみのB-12号墳からは鉄製品が出土しており、男性が埋葬された可能性があります。

このように埋葬される人の数が減るという現象は、弥生時代の終わりごろから古墳時代のはじめにかけて確認できるのですが、何を意味するのでしょうか。

さまざまな可能性が考えられますが、1つの仮説として、「限られた人だけが丁重に埋葬されるようになる。」という考えがあります。B-16号墓が作られた時は「有力な家族の夫婦と早世してしまった子供や、その兄弟姉妹とその夫婦の早世した子供」といったように有力な人物やその関係者が多数、丁重に埋葬されたと考えられます。少し時が進み、B-13号墓が造られたときは「有力な夫婦あるいは兄弟（姉妹）とその子供」が1組だけ、丁重に埋葬されたと考えられます。つまり「複数の家族」ではなく、「特定の家族」だけが特別に葬られているのです。そしてB-12号墳では「有力な男性」が1人だけ丁重に埋葬されたと考えられます。このお墓は特定の「個人」だけが特別に葬られていると捉えられます。このように弥生時代の終わりごろから古墳時代のはじめにかけて、丁重に埋葬さ



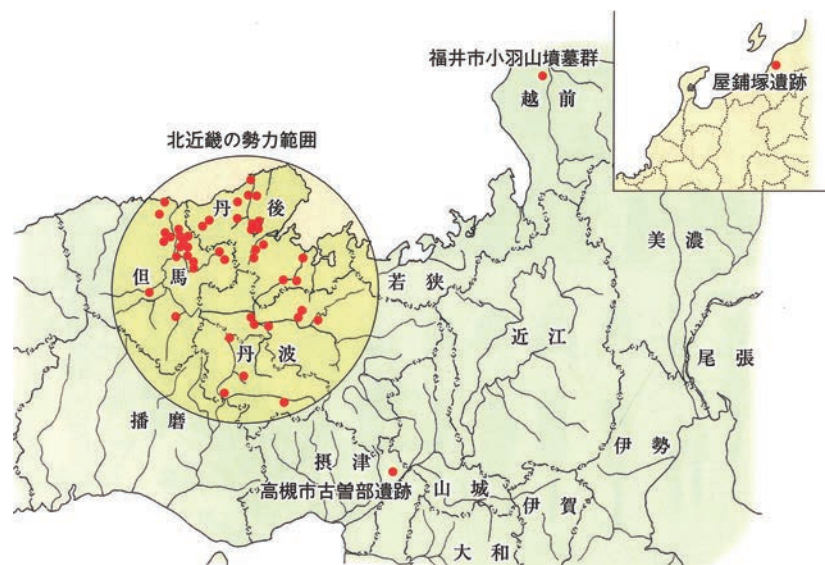
第5図 埋葬された人々の変化

れる人物が厳選されていくようです。「家族墓」から「個人墓」への変化の背景に、「特定個人への権力の集中」があったとすると、松田古墳(墳墓)群は、まさにその移り変わりがよくわかるお墓の集まりであるといえそうです。

4. 松田古墳(墳墓)群と弥生時代の丹後半島

最後に、松田古墳(墳墓)群がつくられた時代の丹後半島の様子を見ながら、埋葬された人々の暮らしを想像してみたいとおもいます。松田古墳群が作られた、弥生時代の終わりごろ、丹後半島で人々が暮らした集落の様相は詳しくわかっていません。それ以前、弥生時代中ごろは京丹後市^{とちゅうがおか}途中ヶ丘遺跡、同奈具・奈具岡^{なく なくおか}遺跡、与謝野町^{ひよしがおか}日吉ヶ丘遺跡、といった大きな集落をつくって大人数で生活していたことがわかっています。このころの大きな集落は周囲に堀のような溝をめぐらせた「環濠集落」と呼ばれるムラを台地や丘陵の上に形成しており、環濠の外側や隣の丘陵など、ムラの近くにお墓をつくっていたようです。弥生時代の終わりごろは集落の様子がよくわからない一方で、ムラから離れた山の上に特徴的なお墓をつくることが明らかになっています。それが「台状墓」と呼ばれるお墓で、松田古墳(墳墓)群もその中の一つです。これは山の斜面を切り崩して平坦面をつくり、そこに穴を掘って人を埋葬するお墓です。この「台状墓」は亡くなった人を埋葬した穴の中で土器を割って供えるという「墓壙内破碎土器供献^{ぼこうないはさいどききょうけん}」という特別な儀式を行っており、この儀式を共有する勢力が北近畿を中心とした広い範囲に存在したことがわかっています(第5図)。『魏書』東夷伝倭人条(魏志倭人伝)には「今使譯所通三十國(今、使訳通ずる所三十國。)」とあり、その一つとして「北近畿化圏」とも呼べるような大きなクニが存在したのかもしれません。

松田古墳(墳墓)群がつくられたのと同じ時期、丹後半島では二つの有名なお墓がつくられています。それが与謝野町^{おおふうのみなみ}大風呂南1号墓と赤坂今井墳墓です。大風呂南1号墓は幅17m、長さ27mの規模の台状墓で五つの埋葬施設(墓穴)が見つかりました。その中で最も大きな埋葬施設(墓穴)では、日本では四つの遺跡からしか出土していない



第6図 墓壙内破碎土器供献と「北近畿文化圏」
(図は肥後2016から抜粋)

ガラス釦くしろがみつかり、鉄剣や銅釦といった当時、貴重だった財宝もたくさん副葬されています。赤坂今井墳墓は幅36m、長さ39m、高さ3.5mの巨大な墳丘をもつ大型のお墓で、墳丘の頂上からは6基の埋葬施設(墓穴)が見つかりました。お墓は国史跡に指定され、遺跡を未来に残すため中央の一番大きな埋葬施設(墓穴)は調査されていませんが、二番目に大きな埋葬施設(墓穴)からは大量の朱と豪華な髪飾り・耳飾りが出土しました。2つのお墓は「王墓」と考えられ、「北近畿文化圏」を統括した人物のお墓と考えられています。松田古墳(墳墓)群に埋葬された人物はこうした「王」のもとで、「北近畿文化圏」のクニの一員として一つの集落をまとめあげた指導者ではないでしょうか。



写真6 大風呂南1号墓出土ガラス釦(左)と赤坂今井墳墓出土の頭飾り(右)
(左：重要文化財、与謝野町所有、右：府指定文化財、京丹後市所有)

〈引用・参考文献〉

- 石原道博1985『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』中国正史日本伝(1) 岩波書店
- 高野陽子2006「丹後地域—擬凹線文系土器の様式と変遷—」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 野島 永2000「弥生時代の対外交易と流通—弥生墳墓の副葬鉄器を通して—」広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』(季刊考古学 別冊10) 雄山閣
- 野島 永・野々口陽子1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 野島 永・野々口陽子2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)」『京都府埋蔵文化財情報』第76号
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 肥後弘幸1996「家族墓へのアプローチ—北近畿後期弥生墳墓の場合—」『京都府埋蔵文化財論集』第3集
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 肥後弘幸2016『北近畿の弥生王墓・大風呂南墳墓』シリーズ「遺跡を学ぶ」108 新泉社。

最新の弥生時代像と京都の弥生遺跡

立命館大学文学部 長友朋子

はじめに

米の消費量が減少しているといわれていますが、米不足で価格が高騰^{こうとう}すると生活に支障がでるほど、現代の私たちにとって米は今でも重要な食糧です。江戸時代には税として集められ、米の生産量の石高^{こくだか}で藩の規模が定められるなど、歴史的にも重要な米。水稻農耕は日本社会の基盤を形成したということが出来ます。その米作りが始まったのが、弥生時代です。今日は、その弥生時代について最新の研究の成果もふまえながらお話しします。

1. 弥生時代の年代観と環境

(1) 弥生時代のはじまり

考古学的研究に加え、近年、放射性炭素年代測定法^{ほうしゃせいたんそ}、DNA分析、酸素同位体分析^{どういたい}、鉛同位体分析など、理化学的研究が進み、様々なことがわかってきました。その中で、特に弥生時代像の理解に大きな影響を与えたのは、放射性炭素年代測定法による研究成果です。2003年、国立歴史民俗博物館は弥生時代の開始が500年さかのぼり紀元前10世紀であると発表し、大きな衝撃をあたえました(春成ほか2003、設楽2004)。この成果を受けて考古学者も素早く反応し、弥生時代開始の鍵となった青銅器などの歴年代を再検討して、およそ紀元前9～8世紀頃までさかのぼることを突き止めました(大貫2003・2005、宮本2003、庄田2004、中村2005・2007)。

ところで、弥生時代の始まりが従来考えられていたよりも、400～500年早くなったことにより、弥生時代像の理解はどのように変わったのでしょうか。青森県弘前市砂沢遺跡で弥生時代前期の水田がみついていることから、かつて水稻農耕はすばやく東北地方まで広がったと理解されていました。しかし、弥生時代の開始年代がさかのぼるという理解にたつと、水稻農耕は徐々に時間をかけて広がったということになります。また、年代観の変更で、東北アジアで鉄器の普及が拡大した戦国時代後期より、日本列島の鉄器出現年代がさかのぼることになり、日本列島最古とされていた鉄器の出土状況について、再検討されました。その結果、弥生時代中期以降にはじめて金属器(青銅器・鉄器)の使用が始まることが確認され、水稻農耕の始まりから400年ほどたってからようやく金属器が導入され

るといことがわかりました。

(2) 弥生時代とは

日本の先史時代は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代という固有の名称を用いて時代を区別されていますが、デンマークのクリスチャン・トムセンは、先史時代を実用的な道具の素材によって、石器時代、青銅器時代、鉄器時代の順で時代が移り変わることを明らかにしました。これを三時代区分法と呼びます。さらに石器時代は、打製石器を用い狩猟採集をおこなっていた旧石器時代と、磨製石器を用いて農耕をおこなう新石器時代に分けられます。隣の韓国も最近では、古い方から旧石器時代、新石器時代、青銅器時代、初期鉄器時代、^{げんさんこく}原三国時代というように、三時代区分法を重視して各時代を呼称するようになりました。もし日本でこの時代区分をあてはめれば、弥生時代は、新石器時代および青銅器・鉄器時代と呼び分けることも可能です。したがって、弥生時代は実は一つの時代ではなく、いくつもの時代に分けられるのだという主張も最近出されるようになってきました。しかし、のちに述べるように、少なくとも水稻農耕の普及が青銅器や鉄器を使用する時期の基礎となり、社会は連続的に継続していることから、日本列島においては弥生時代という一つのまとめ方でよいのではないかというのが、現時点での私の考えです。

2. 水田のある風景

(1) タイの農村風景

弥生時代の始まりにおいて、獲得経済から生産経済への変化が強調されますが、米の生産が始まって具体的に一体何が変わったのでしょうか。私は野焼き土器の製作技法を知るために、現在も野焼き土器作りがなされている、タイで調査を実施してきました。昔ながらの水田が広がる東北タイは、弥生水田の姿を知る手がかりを得ることができます。ある日、いつものように村を調査していると、学校が終わった小学生らしい子供たちの楽しそうな声が聞こえました。何をしているのか見ると、稲を刈り取った田で、地面にあいた穴の入り口に火を焚き、煙を穴の中に充満させて、小動物が出てくるのを待っているのです。一見、遊んでいるように見えたのですが、彼らは食料を獲得しようとしていたのです。また、村の女性が、長い棒で小さな蟹^{かに}をとるための使い方を教えてくれました。蟹は稲刈り後の田でとれるそうです。また、水田があった場所に池を掘って水をため、魚を大きく育てます。網でとった魚は日々の大切なおかずになります。このように、水田は稲を育てるだけではなく、虫や小動物、魚などタンパク質食料をとるための重要なフィールドにもなります。また、^{わら}藁は土器を焼成する燃料として用いますし、水田の周囲にある木々は薪^{まき}にして調理用の燃料になります。弥生時代の水田がこのような姿であったとするならば、弥

生時代の人々は食料を得るために水田を大いに活用することができたでしょう。

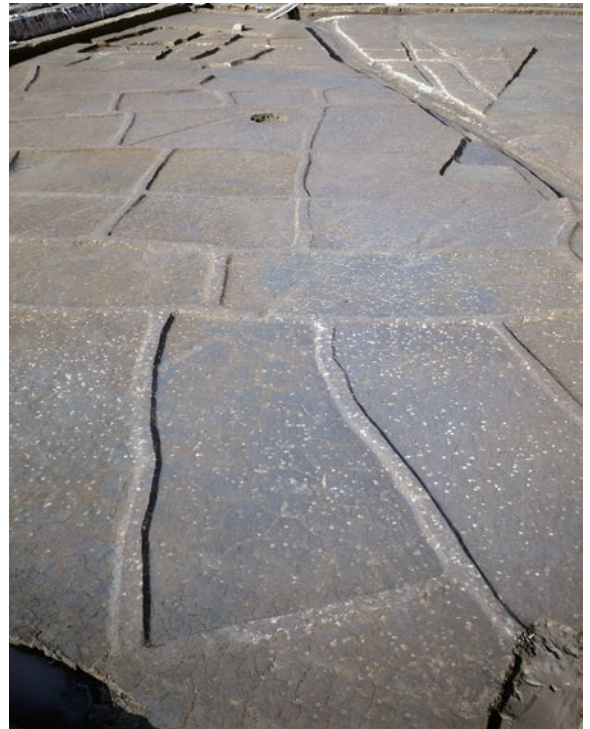
(2) 弥生の村と水稲農耕の広がり

昔を知る人は、なんだ、そんなことかと思われるかもしれません。しかし、これは縄文時代の風景とは大きく違うのです。縄文時代の東日本には、大規模な環状集落が営まれたことが知られています。食料の豊富な環境があれば、青森県^{さんないまるやま}三内丸山遺跡のように、縄文時代においても1,500年も集落を継続することができたのです。川や海へ出て漁労を、山へ入って狩猟をおこない、森で^{けんかるい}堅果類を、海で貝を採集し、時に粟や豆、エゴマなどを栽培していました。多角的な食糧獲得をおこなうための活動範囲はかなり広がったでしょう。

これに対し、弥生時代になると水稲農耕をおこなうために、小河川に^{せき}堰を設け掘削した水路を通じて水田に水を引き、縄文時代に比べるとはるかに積極的な土地開発をするようになります。水田で米を収穫するだけでなく、タンパク質も取得するので、縄文時代に比べると食料を獲得するための活動範囲が非常に狭くなります。また、田畑の手伝いをする子供を多く出産し、人口が増加していきます。そのため、縄文時代に比べて、弥生時代になると人口密度が高くなったと予想されます。

朝鮮半島から北部九州に水稲農耕が伝わると、温暖で湿潤な西日本に多くの水田が営まれました。住居や遺跡の数から、縄文時代においては、東日本の方が西日本よりも人口が多かったと推測されますが、食料を自ら生産することにより西日本の人口は増加したと予想されます。人口が増加するとさらに多くの食料を必要とし、水田を広げるとさらに労働力が必要になります。このように、弥生時代には水稲農耕の普及とともに、人口密度の高い領域が拡大していくことになります。

弥生の村はどのような姿だったのでしょうか。水田に適した土地に住まうので、縄文時代に利用されなかった低地にも、人々が集落を構えるようになりました(第1図)。水害や害獣から身をまもるため、村の周囲には^{かんこう}環濠が掘られ、人々は集住するようになります。井戸を掘って生活用水を確保し、穀物は高床倉庫を作って乾燥した状態で保管しました。死者は、生者と区別して集落の外に埋葬されましたが、集落の近くに墓域が設けられました。生活スタイルは大きく変化し、^{さいし}祭祀は^{ごこくほうじょう}五穀豊穡を願うものへと変質し



第1図 内里八丁遺跡の水田(竹原1991)

たでしょう。京都では鴨川左岸の京都大学構内遺跡や、丹後地域の野田川流域の蔵ヶ崎遺跡で前期の水田が見つかっています(伊藤1993、竹原1996)。

3. 金属器からみた京都と東アジア世界

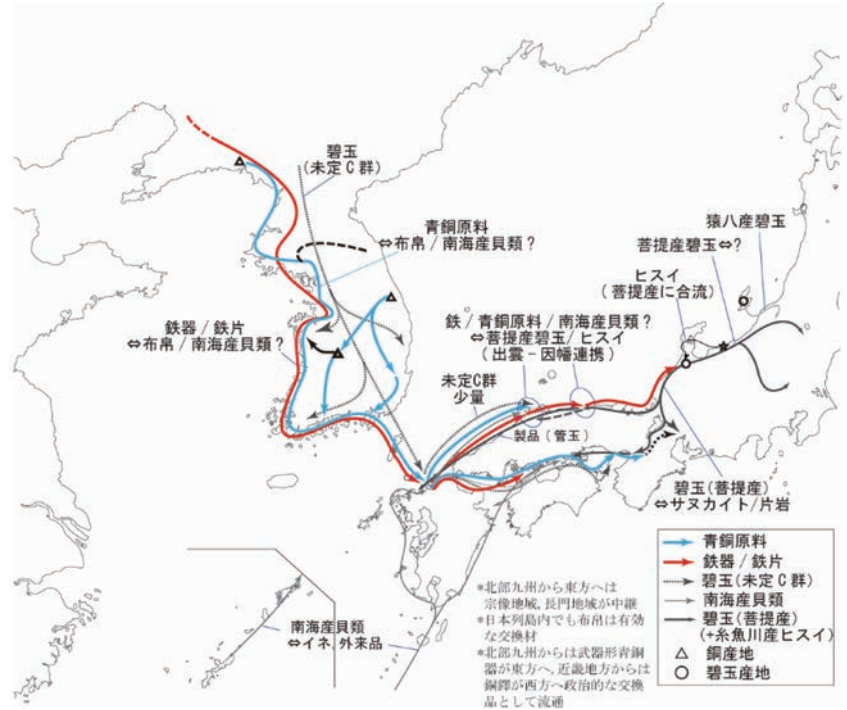
(1) 東アジア世界と青銅器・鉄器の流通

青銅器と鉄器はともに、弥生時代中期の初めころに導入されました。最初は武器形青銅器が導入されましたが、やがて北部九州では首長やエリート層の墓に副葬され、中国地方から東海地方では祭祀具、関東地方では装身具として用いられるようになります。これに対して、鉄器は工具として実用的な用途で用いられました。

祭祀として用いられた代表的な青銅器は銅鐸どうたくです。銅鐸は、出現期には木にぶら下げて音を鳴らし、本来の鐸の機能を持っていましたが、やがてぶら下げることができないほど、巨大な銅鐸が作られるようになっていきます。これを、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へ変化したと佐原真さばらまことさんは表現しました(佐原1996)。銅鐸には絵画の描かれる場合があり、トンボや鳥、倉、脱穀をする人など、水田に関連する絵画や風景が描かれることから、五穀豊穡を願った祭祀で用いられたと考えられます。豊作を願う祭祀をおこなうのに、青銅器はなくてはならない道具になったのです。しかし、青銅原料は海外に依存していたので、入手しようとする、東アジアを含む広域な流通網に結び付く必要がありました。青銅器は銅と錫、鉛の合金ですが、弥生時代中期中ごろまでは朝鮮半島、中期後葉からは中国華北の鉛を使用していたことがわかっています。また、最初は中国東北部から燕系の鉄器が輸入されていましたが、「国は鉄を出し、韓・濊・倭皆従いてこれを取る。諸々の市買には皆鉄を用い、中国の銭を用いるが如くして、また以て二郡らくろうぐん たいほうぐん(楽浪郡・帶方郡)に供給す。」と『三国志 魏書』「烏丸鮮卑東夷伝弁辰条」に記されるように、鉄鉱石が朝鮮半島南東部で採取されるようになると、朝鮮半島から鉄器を入手するようになります。しかし、東アジア情勢は様々な要因で揺れ動いています。弥生時代の人々は、その状況を見極めながら鉄器や青銅原料を入手しなければなりませんでした。

ところで、青銅器原料は非常に貴重だったと予想されますが、その価格はどのくらいだったのでしょうか。難波洋三なんばようぞうさんによると、全高約42cmの扁平鈕式新段階の六区袈裟襷文銅鐸の青銅重量は約3kgで漢では粳0.45m³と等価、全高約70cmの近畿式銅鐸の重量は約10kgで粳1.5m³と等価、と試算されています(難波2016)。これに加わる運搬費用は不明ですが、『延喜式えんぎしき』によると博多津から難波津まで船で運ぶと、積載した米の4割の経費がかかったそうです。このように青銅原料は対価を支払って入手したと予想されています。その対価として、布など様々な交換物を持って行ったと考えられますが、交換物をそろえるた

めには米が役立ったでしょう。青銅原料の流通量が多くなる弥生時代中期中頃、青銅器の鑄型や青銅器が多く出土する播磨地域の土器が、神奈川県なかざとの小田原市中里遺跡で1700点余り見つかりました。中里遺跡は関東地域で初めて水稻農耕を始めた村です。播磨地域の人々は、青銅原料の交換物を貯えるため、新たな開拓地を求めて遠く東へ向かったのでしょうか(長友・石川・深澤編2022)。それほど遠くへ行か



なくても水田を開拓できる土地はたくさんあったのではないかと思われるかもしれませんが、しかし、弥生時代中期の灌漑水田の技術では、利用できる土地の条件は限られていたのです。

巨大な銅鐸を鑄造する技術の発達した青銅器とは対照的に、鉄器の製作技術はすぐには伝わりませんでした。かつて古代中国では、鉄と塩の流通が管理されていたことからわかるように、武器を製作し軍事力に結び付く鉄に関わる技術は、門外不出とされていたでしょう。弥生時代の人々は、かろうじて入手した鉄器をカットし刃をつけて工具にするか、簡易な小鍛冶こかじにより小さな鉄製工具を製作するのが精いっぱいでした。しかし、徐々に入手できる鉄器量が増加し、流通が円滑になっていきます。やがて、弥生時代終末期になると、鉄器が重視されるようになり、首長層が生産を管理するようになります(長友2012・2022)。

青銅器や鉄器、ガラスなどの希少品は、朝鮮半島南部と九州北部を交易拠点として、日本海沿岸や瀬戸内海・太平洋沿岸を通じて、近畿地方や東日本、東北地方へも流通しました。また、北陸地方で産出する管玉は、日本海沿岸を通じて西へ流通しました。詳細に検討すると、青銅器は出雲地域あたりまでの日本海側に流通しますが、主に瀬戸内海を中心として流通し、鉄器は瀬戸内海にも流通しますが日本海を主として流通網が発達したことが、近年わかってきました(中村2022、第2図)。この東アジアにおける日本列島の流通網を念頭に置きながら、京都府の遺跡をみてみましょう。

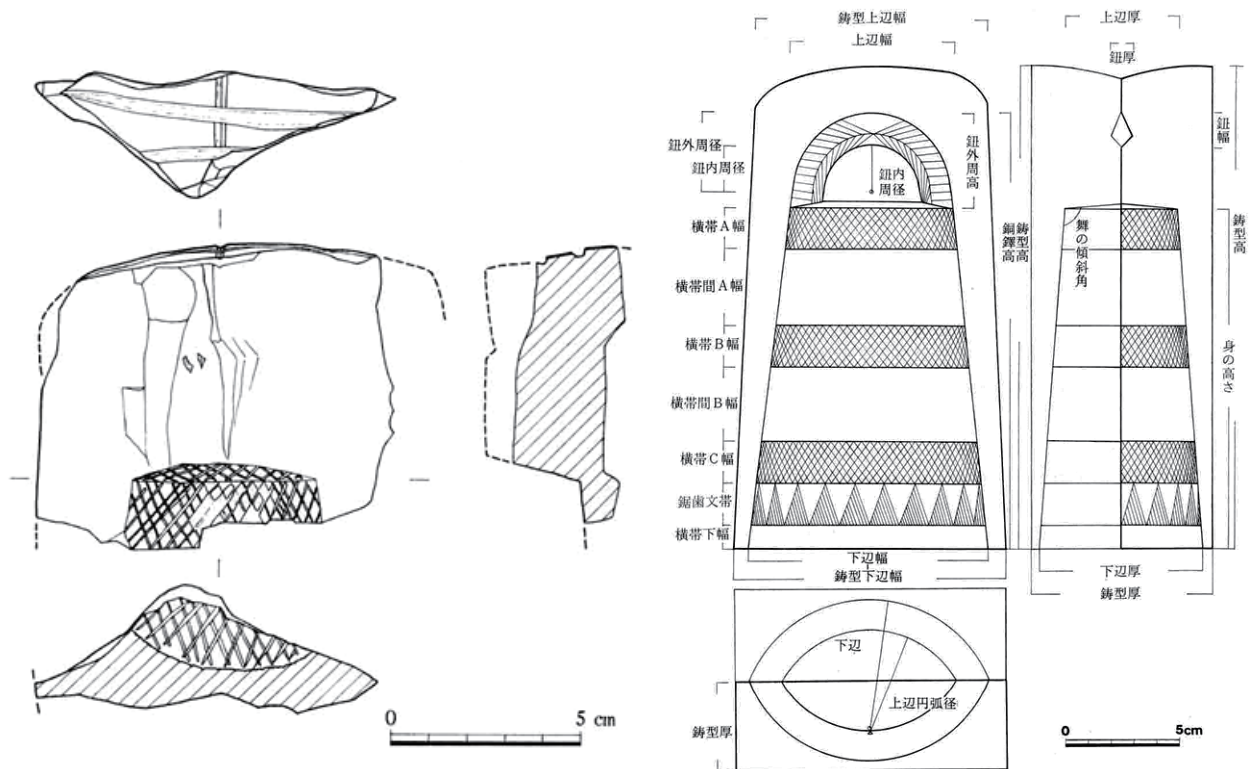
(2) 京都の遺跡と交流関係

中期になると交流が活発になり、京都にも遠くから様々なものが持ち運ばれました。まず、弥生時代中期前葉の銅鐸鑄型がみつかった向日市鶏冠井遺跡^{かいで}があげられます(第3図)。鶏冠井遺跡は淀川上流に位置します。淀川流域は、後に安満遺跡^{あま}や東奈良遺跡^{ひがしなら}など青銅器生産の一大拠点となるような遺跡が出現する場所です。瀬戸内海を介した青銅器の流通網を通じて、鶏冠井遺跡の人々は早い時期から青銅を入手することができたのです。

巨椋池南岸^{おぐらいけ}の市田齊当坊遺跡^{いちださいとうぼう}では、北陸産碧玉を原料にした玉生産がおこなわれました(第4図)。山城地域の土器は近江地域との共通性が高く、人々が盛んに交流していた様子が見えます。この碧玉は、北陸地方から近江地域を通じて運ばれたのでしょうか。

また、日本海沿岸にそって鉄器が流通しますが、弥生時代中期後半には、丹後地域の奈具岡遺跡^{なぐおか}や日吉ヶ丘遺跡^{ひよしがおか}で鉄器生産がおこなわれました。特に、奈具岡遺跡では水晶の玉が生産され、他地域に搬出されたと考えられます。鉄器生産をおこなっていた日吉ヶ丘遺跡では、長辺32m、短辺20mの大規模な方形貼石墓^{ほうけいはりいしば}の墳丘が築造され、死者の埋葬された主体部から水銀朱のまかれた状態で多数の碧玉製玉が検出されました。

後期になると、丹後地域の墓に鉄器が副葬されるようになります。鉄器は後期においても希少ですが、この地域の人々は日本海沿岸の鉄器流通網にアクセスし、多くの鉄器を朝鮮半島から入手することができたのです(第5図)。また、近畿地方ではまれであった副葬



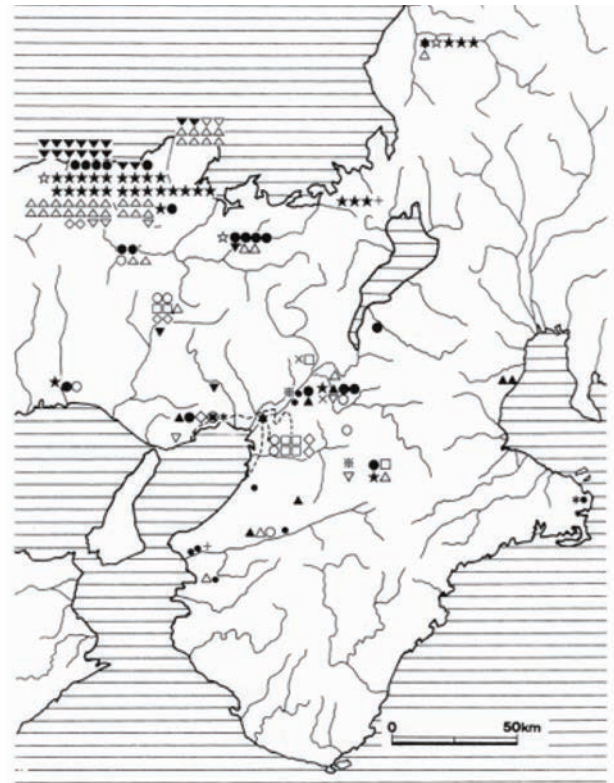
第3図 鶏冠井遺跡出土の鑄型と復原図(山中1985)

するという習俗が導入されたのも重要な点です。西の地域から伝わった習俗を容したのでしょう。また、この地域では、^{はさいどききょうけん}破碎土器供献や、^{にしたに}西谷式といわれる地域色の強い土器の用いられることが明らかにされています(肥後2000、高野2021)。後期初頭になると、京都盆地の桂川左岸の^{にしきょうこく}西京極遺跡でも、鉄器生産がおこなわれるようになりました。また、後期以降になると、摂津西部や播磨東部に地域色の強い丹後地域の土器が多く分布することから(桐井2016)、鉄器流通網にアクセスできる丹後地域の人々は、大阪湾岸沿岸へも鉄器をもたらしたと考えられます。さらに、京都南部の木津川流域右岸にも南下し、在地の人々とともに^{つかもとひがし}塚本東遺跡などの周辺に集落を形成するようになったと推測されます。

ところで、近年酸素同位体分析の研究により、後期から気候が湿潤で冷涼になるという興味深い成果が示されました(中塚2022)。このころ京都では、乙訓地域の^{いまごと}今里遺跡、鴨川上流域の植物園北遺跡、巨椋池南岸の^{さやま}佐山遺跡などに新しい集落が形成されはじめます。さらに、木津川下流左岸の^{みのやまはいじ}美濃山廃寺下層遺跡や^{きづしろやま}木津城山遺跡など、南山城地域の丘陵部にもやや大きな集落が形成されるようになります。京都の環境変化を詳細に検討する必要がありますが、洪水被害や気候変化による米の収穫量の減少などにより、村を移動した可能性は十分に考えら



第4図 市田齊当坊遺跡出土の碧玉製玉未成品(奥村他2004)



凡例 素環頭鉄刀；★、鉄刀；☆、鉄剣；★、鉄鏃(有茎腸扶三角形式；▲ 無茎三角形式；▼ 柳葉形式；●)、袋状鉄斧；○、板状鉄斧；□、鉈；△、刀子；▽、鉄鑿；◇、鋤・鋙先；×、鉄鎌；+、釣針；*、鑄造鉄斧；◎、鑄造破片板状鉄斧再生品；●、鑄造破片鉄鑿再生品；◎、鑄造破片鉄鏃再生品；◎、不明品ほか；●、鍛冶関連遺跡；※

第5図 弥生時代後期後半～庄内式期の近畿地方鉄器出土状況(野島1996)

れます。木津城山遺跡の方形台状墓の埋葬施設からは破鏡、線細式から浮彫式とおもわれる獣帯鏡の銅鏡片がみつき、住居からは素文鏡が検出されました(伊賀2001)。さらに、集落に近い場所から6区袈裟襷文銅鐸が出土しています。弥生時代の代表的な祭祀具である銅鐸と、破鏡や素文鏡であるものの、古墳時代に重視される鏡が、近い場所で見つかった点は注目されます。

おわりに

弥生時代前期の鴨川左岸や右岸、さらに巨椋池周辺に水田が作られることから、扇状性低地や三角性低地の広がる山城盆地北部が、食料生産の中心地だったことがわかりました。弥生時代中期になると流通網が発達し、日本海沿岸から鉄器、北陸地方からの碧玉、瀬戸内海から淀川を通じて青銅器が、それぞれ京都へと供給され、盛んに生産が行われるようになります。そして、弥生時代後期になると、気候が湿潤で冷涼になり、集落を丘陵へ移動させたり集住するなど、集落を再編せざるをえなくなりました。終末期には首長が、青銅器だけでなく鉄器生産をも管理するようになります。やがて、古墳時代になると、丹後地域には網野銚子山古墳をはじめとした大型前方後円墳が、木津川右岸に多数の鏡が副葬された椿井大塚山古墳が築かれ、弥生時代から人口密度の高かった乙訓地域では、競うように大型古墳が次々に築造されます。古墳時代に勢力を握った大和政権が所在する大和盆地のすぐ北に位置する山城地域は、中央政権にとって重要な交流拠点の一つになっていくのです。

引用文献

- 伊賀高弘2001「南山城地域の弥生向地性集落についての一試考」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 pp.41-52
- 伊藤敦史1995「京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第57号
- 大貫静夫2003「正統と異端：遼東・朝鮮半島の青銅短剣と土器の年代をめぐる二つの流れ」『考古学研究会東京例会第4回例会研究発表資料集』東京、37 - 46
- 大貫静夫2005「最近の弥生時代年代論について」『Anthropological Science (Japanese Series)』113 - 2 pp.95-107
- 桐井理揮2016「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第7集 pp.127-142
- 佐原真1996『歴史発掘8 祭りのカネ銅鐸』講談社
- 設楽博己2004「AMS炭素年代測定による弥生時代の開始年代をめぐって」『ゆらぐ考古学の常識』総研大 pp.97-129

- 庄田慎矢2004「比来洞銅剣の位置と弥生歴年代論(上)」『古代』117 pp.1-29
- 高野陽子2021「古墳出現前夜における丹後地域王権の「畿内」交渉―首長墓の供献土器―」『京都府埋蔵文化財論集』第8集 pp.101-112
- 竹原一彦1996「京都府内検出の水田遺構」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 pp.285-300
- 肥後弘幸2000「弥生王墓の誕生―北近畿における首長墓の変遷」『季刊考古学』10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣
- 中塚武2022『気候適応の日本史』歴史文化ライブラリー544 吉川弘文館
- 中村大介2005「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論集』大阪大学 pp.51-86
- 中村大介2007「遼寧式銅剣の系統的展開と起源」『中国考古学』7 pp.1-29
- 中村大介2022「楽浪郡設置以前の黄海東部交易と弥生文化」『南関東の弥生文化』吉川弘文館
- 長友朋子2012「弥生時代における日常道具生産と分業化」『菟原Ⅱ』森岡秀人さん還暦記念論文集 菟原刊行会 pp.191-202
- 長友朋子2022年「近畿地方の金属器生産と弥生社会」『後藤明先生退職記念論文集』雄山閣pp.61-82
- 長友朋子・石川日出志・深澤芳樹編著2022『南関東の弥生文化』吉川弘文館
- 難波洋三2016「銅鐸の価格」『季刊考古学』第135号 雄山閣 pp.70-74
- 野島永1996「近畿地方の弥生時代の鉄器について」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 pp.109-122
- 春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔2003「弥生時代の開始年代―14C年代の測定結果について―」『日本考古学協会第69回総会』日本考古学協会
- 宮本一夫2003「弥生の実年代を考古学的に考える」『東アジアの古代文化』117 pp.130-140
- 山中章1985「鶏冠井遺跡銅鐸鑄型の復原」『京都府埋蔵文化財用法』第18号 pp.1-5



KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER

第 157 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 7 年 2 月 22 日 (土)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<https://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189



FB



X